

# 松阪花菖蒲 (Matsusaka Iris)

2016(平成28)年6月

松阪三珍花保存会

## ● 松阪花菖蒲(はなしょうぶ)の歴史

松阪花菖蒲(Matsusaka Iris)は一般には伊勢花菖蒲(伊勢系)と呼ばれ、江戸系花菖蒲・肥後系花菖蒲と共に日本を代表する古典園芸植物の一つです。

松阪花菖蒲の起源は松坂城下・殿町に住む徳川紀州藩士であった吉井定五郎(1776~1818)がノハナショウブから品種改良されたのが始まりと伝えられています。子息吉井政之助(二代目定五郎1861没)に引き継がれ、孫の吉井吉之丞(1829~1907)がさらに多くの品種を作出した。

その後、同町の野口才吉(1829~1910)、新座町の長林堅三郎(1876~1937)などに分譲され、門外不出として栽培されていました。野口才吉歿後、親戚に当たる久保町の乾達二が松阪花菖蒲の古文書とともに品種を引き継ぎました。他にも松阪の服部栄次郎(1885~1956)、津の伊関健次郎、吉川万吉などが松阪花菖蒲の栽培、改良に努められました。

乾達二没(1922)後、乾夫人より久保町の青木清次郎が遺品として全部引き継いで保存されてきました。青木は戦中・戦後の米の作付拡充など厳しい農地事情の中をひたすら品種保存に情熱を傾け、その努力は高く評価されています。

長林堅三郎は野口才吉歿後の松阪三品(松阪菊、松阪花菖蒲、松阪撫子)の品種保存、育成の指導者として活躍しており、1928(昭和3)年、立野町の県立飯南農学校教諭岡村金蔵(1903~1976)に松阪花菖蒲11種と松阪撫子、松阪菊の苗と共に、この松阪三珍花を永く保存して欲しい旨を依頼して譲り渡しました。

岡村金蔵は長林堅三郎の指導を受け品種保存、栽培に情熱を傾け、当時日本を代表する園芸誌「実地園芸」に「伊勢撫子に就いて」(昭和6年12月号)、「伊勢花菖蒲に就いて」(昭和7年10月号)、及び「伊勢菊の品種と栽培」(昭和10年6月号)を発表しました。

戦後、三重大学の冨野耕治博士らにより本種の紹介や研究が精力的になされ、更に新花も多く作出されました。1952(昭和27)年に三重県教育委員会により松阪花菖蒲は、松阪撫子・松阪菊とともに天然記念物に指定されました。また、1970(昭和45)年には花菖蒲を県花に決定しました。

1970(昭和45)年、松阪市は青木清次郎宅の松阪花菖蒲を市の天然記念物に指定して頌徳碑を建立し、松阪市長・吉田逸郎の名で碑文にその功績を讃えています。同年、松阪市立公民館(現、松阪公民館)に於いて、松阪三珍花講座を開設、花菖蒲の講師に岡村金蔵、青木清次郎両氏に依頼しました。1971(昭和46)年1月松阪三珍花の会(現、松阪三珍花保存会)が発足し松阪公民館を中心に活動を続け現在に至っています。現在、保存会としましては戦前までに作出された松阪花菖蒲古花50余種を主に会員が保存育成に励み、毎年6月中旬に松阪公民館で展示会を開催しています。その後、有志により本居宣長記念館、松阪市歴史民俗資料館、松阪商人の館、原田二郎旧宅に展示しています。

また、松阪市住民協議会(松阪中央・幸まちづくり)を核とした「歩いて楽しい道づくり実行委員会」で松阪三珍花発祥地の特定、花碑建立基金の呼びかけ、そして花碑設計・建立工事などがなされ本年6月26日(日)に松阪第一公民館および三花発祥の地(地権者宅)にて「松阪三珍花 花碑建立 記念式典 及び 除幕式」となりました。今後はこの発祥の地でそれぞれの花を展示する予定です。

## ● 松阪花菖蒲(はなしょうぶ)の特徴・仕立て方

松阪花菖蒲は、江戸・肥後花菖蒲と比較して女性的な優雅さを発現した美しい花であり、多くの人々に愛好されている。以下はその特徴と仕立て方をまとめたものである。

1. 花は三英咲きで、花弁は縮緬地の薄弁で大きく発達し、互いに相重なって良く垂れるものを優品とする
2. 内弁は立ち鉾となり、変化を添える。
3. 花芯の先端は鶏冠状の小片(蜘蛛手)となり、縁の辺深く切れ込むものが多く、端正なる花姿に優艶な趣きを添える。
4. 花茎は太く短くて分岐せず、葉とは殆ど同じ高さに伸び、開花期における花と葉の調和が良くとれている。
5. 葉は厚く広巾で剣状に直立し、葉面に数条の縦筋がある。
6. 花色は全般的に純粹で明るいものが多く、開花後、時間の経過と共に、花型・色彩変化を来す。
7. 普通の品種は染色体数が24であるが、25という異数体が多く、そのため結実し難いものもある。
8. 全体に生育力がやや弱く、繁殖力が乏しい。
9. 松阪三珍花保存会における展示用の仕立て方は、7号鉢を用いた3芽植えを基本とする。